

文学と宗教からみた長安と朝鮮・日本

言語のカベ越え 国際交流に新たなステージ

西北大学と国際研究会議

国際交流協定校である中国・西北大学との国際研究会議が今夏、専修大学を会場に行われた。その模様を松原朗文学部教授に寄稿してもらった。

今回で第3回となる「専修大学・西北大学国際研究会議」は、専修大学生田キャンパスにおいて8月25日から2日間にわたって開催された。



2日間にわたり活発な討論が展開された

中国語文学系の専門家6人来学

西北大学からは、団長の張弘・文学院教授をはじめとする6人が参加した。前2回は西北大学で開催されており、相互主義の立場から専修大学での開催が強く求められる中での開催であった。あいにくの台風11号の襲来と重なったにもかかわらず、他大学からの来訪者も含めて出席者は60人を超える盛大な規模となった。

西北大学は、陝西省西安市にある有力大学であり、本学とは1999年に提携関係を結んで以来の「友人」である。

昨年西安で、遣唐留学生の墓誌「井真成(せいしんせい)墓誌」が発見された。これについて、専修・西北の両大学は精力的に共同研究を推し進め、その中間報告として、今年の1月28、29の両日に、朝日新聞社との共催で「専修大学・西北大学国際学術シンポジウム」「同市民セミナー」を開催した。その概要が、専修大学・西北大学共同プロジェクト編『遣唐使の見た中国と日本—新発見「井真成墓誌」から何がわかるか』(朝日選書)として出版されたことは記憶に新しい。

なお、このたび来校した西北大学の6人、張弘(六朝仏教文学)・張文利(宋代文学)・李芳民(唐代文学・仏教地理学)・賈三強(宋代文学・文献学)・劉衛平(漢代文学)・方蘊華(漢代文学)の諸氏は、考古学ではなく、いずれも中国語文学系(中国文学科)の専門家である。

25日の午前中は、国際交流センター訪問と図書館の参観が行われた。図書館では、貴重な和漢の典籍に加えて、専修大学の世界に誇るベルンシュタイン文庫(フランス革命コレクション)を閲覧した。

同日午後は、荒木敏夫文学部長の開会の辞によって、研究会議が始められた。西北大学からは、団長の張弘・文学院教授の開会のあいさつがあった。日本側9本、西北大側6本の合わせて15本の発表を、時間の流れに従って列記しておく(敬称略)。

【25日午後】

- ① 西條勉(専大)「日本神話における天命思想の受容—天子受命と皇孫降臨」対論者・方蘊華
- ② 賈三強「清・雍正《陝西通史・経籍部》所収の前漢の別集考」対論者・三浦理一郎(専大)
- ③ 原豊次(米子高専)「古筆切(こひつぎれ)資料から見る日中文学の交流」対論者・三田村圭子(明海大)
- ④ 高野菊代(専大)「《源氏物語》の死と中国漢詩—白居易を軸として」対論者・瀧川裕美(西北大)
- ⑤ 劉衛平「《詩経》「彤管」諸解弁義」対論者・瀧川裕美



握手を交わす荒木文学部長(左)と西北大学団長の張弘・文学院教授

【26日午前】

- ⑥ 土屋昌明(専大)「長安の道教の内道場と詩人たち」対論者・李芳民
- ⑦ 張弘「東晋南朝文学集団と仏教」対論者・石村貴博(國學院)
- ⑧ 李芳民「故事の来源・情景・意味—唐人小説における佛寺の機能と文化的意義」対論者・赤井益久(國學院)

【26日午後】

- ⑨ 皆川雅樹(専大院生)「唐猫」論覚書一九～十一世紀、「内」「外」の狭間で」対論者・劉衛平
- ⑩ 方蘊華「司馬相如「賦心」説の美的期待観と時代精神」対論者・鈴木崇義(國學院院生)
- ⑪ 巖基珠(専大)「韓国における中国小説の受容—《剪燈(せんとう)新話》の場合」対論者・廣瀬玲子(専大)
- ⑫ 三枝壽勝(専大)「韓国における中国詩の受容について—杜詩と《杜詩諺解》」対論者・松原朗(専大)
- ⑬ 山田智(渋谷中学高等学校講師)「墓誌形成史上における長安の位置付け」対論者・賈三強
- ⑭ 松原朗『杜甫巖武反目説話』の消長」対論者・張弘
- ⑮ 張文利「蘇軾の鳳翔における詩作の体裁と題材」対論者・鈴木健郎(専大)

18:00「閉幕の辞」

発表時間20分に続いて、対論者による要約ならびにコメントが5分、その後さらに10分間の質疑応答となる。

発表者は母語を用い、通訳時間は設けずに対論者が異なる言語で要約を取るという方式を用いた。個々の質疑応答は、通訳者が対応した。言語の壁があるにもかかわらず議論は活発なものとなり、司会者がやむをえず議論の収束を促すこともあった。

国際交流協定校との研究交流がこのような国際会議という形を取って継続されるのは、この西北大学とのケースが初めてである。専修大学の国際交流が新たなステージに入ったことを学内外に示す大きな節目となる企画であった。

なお今般の会議では、赤井益久氏(國學院)・内山精也氏(早稲田)をはじめ多くの他大学の関係者の協力を得た。会議が成功裏に終わった今、改めてご支持いただいた関係各位に謝意を表すものである。

(文学部教授・松原 朗)

商学部、ネットワーク情報学部で学期末卒業

商学部とネットワーク情報学部で今年度から導入された「学期末卒業制度」で、17人が学位記を手にした。

商学部では9月20日、川村晃正学部長が、一人ひとりに学位記を授与。「学部で得た実践的な知識を社会で発揮してほしい」と激励した(卒業生=商業学科12人・会計学科4人)。

ネットワーク情報学部では9月27日開催の教授会の冒頭、学位記授与が行われた。齋藤雄志学部長から学位記が授与されると、出席の同学部教員から温かい拍手が送られた(同1人)。

両学部では主要専門科目でセメスター制を導入しており、そのメリットを生かして、この制度が導入された。

※セメスター制とは2学期制により1年を半年間に区切り、履修した科目を集中して学ぶシステム。



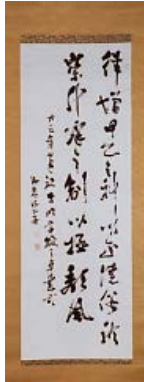
学位記を読み上げる川村商学部長



ネットワーク情報学部で(右が齋藤学部長)

《キャンパス探訪 -28-》

勝海舟「卒業生に贈る言葉」



現代は硬筆主流だが、毛筆の表現力の多様さにはとても太刀打ち出来ない。本学に所蔵されている、書の美のいくつかを紹介する。

明治23年(1890)7月、勝海舟は専修学校の卒業式を祝って、この書を揮毫した。幕末の海軍奉行、江戸城の無血開城、明治維新後も海軍卿を務めた英傑である。どうして、この書が本学に…。

専修大学創立者の一人・目賀田種太郎も幕府旗本の家系であり、幼少から俊才の誉れ高く、新政府の留学生として米国に学んだ。目賀田夫人・逸子は海舟の三女である。目賀田が義父に揮毫を乞うたのか、逸子夫人が父に頼んだのか、その辺りは定かではない。

「律は甲乙の科(とが)を増して、もって澆俗を正し、礼は升降の制を崇んで、もって頹風を極(とど)む。」(『百年史』から)。律(法律)と礼(道徳)が相まって風俗の乱れを正すものと教え、法学生の使命の大きいことを説く。行草体の見事な書風で、毛筆を常用していた時代の、知識人の書である。この時の卒業生は88人だった。